

夏季福音特別集会（5）（浅間高原）

最大なるもの

――コリント前書第13章1～13節――

1957年8月11日

小池辰雄

一個の魂の問題 限りなくながらえる 十字架・復活のキリスト 信望愛一如の永遠的な宿り
十字架がどん底で悪の幕屋を支えている 永遠の今 愛は最大である ダンテの『神曲』天国
篇 キリスト・イエスにある神の愛 祈り（参考）付録

【第一コリント13】（私訳）

- 1 たとい私が人間や天使の異言を語っても、
もし私に愛がないなら、
- 2 私はやかましい鐘やさわがしいどらとなってしまう。
たといまた、私に預言する力があり、
すべての秘義とすべての知識とに通じ、
また山を移すほどの全き信仰があっても、
もし私に愛がないなら、 私はむなしい。
- 3 たといまた、私の全財産を施し、
また私のからだを焼かれるために渡しても、
もし私に愛がないなら、 私は無益である。
- 4 愛は寛容であり、愛は情け深い。
愛は妬まない、愛は誇らない、高ぶらない。
- 5 不作法をしない、利己的でない。
いらだたない、ひとの悪をことあげしない。
- 6 不義を喜ばないで、真理と喜びを共にする。
- 7 愛はすべてを荷いぬき、すべてを信じぬき、
すべてを望みぬき、すべてを耐えぬく。
- 8 愛は断じて滅びない。
しかし預言はすたれ、
異言はやみ、
知識もまたすたれよう。
- 9 なぜなら私たちの知るところは部分的、



私たちの預言も部分的であるから。

¹⁰ 完全なものが来る時、

部分的なものはすたれる。

¹¹ 私たちが幼な子であった時には、

幼な子らしく語り、

幼な子らしく思い、

幼な子らしく計っていた。

おとな 成人となつてからは、

幼な子らしいことは捨ててしまった。

¹² 私たちは、今は鏡で謎めいて見ている。

しかしその時には、顔と顔と合わせて見る。

私の知るところ、今は部分的である。

しかしその時には、私が完全に知られているように、

完全に知るであろう。

¹³ そういうわけで、いつまでもながらえるものは、

信、望、愛の三者である。

これらのうちで最大なるものは愛である。

● 一個の魂の問題

詩篇19篇は、皆さん、御存知であります。

「¹ もろもろの天は神の栄光をあらわし、穹蒼はその手のわざをしめす。² こ

の日はことばをかの日につたえ、このよ知識をかの夜におくる。³ 語らずいわ

ずその声きこえざるに⁴ そのひびきは全地にあまねく、そのことばは地の

はてにまでおよぶ。」(詩篇19・1～4)

「語らずいわずその声きこえざるにそのひびきは全地にあまねく」

という。神さまの栄光は遍照しています。あまね 遍く照っています。太陽の光よりも素晴らしい。

神の御言は肉の耳には聞こえない。己を棄てた心になって碎けて聞かなければ、神さまの

聞こえざる声は聞こえないのです。キリストは言われます、

「聞く耳ある者は聞くべし」

と。キリストは今の学者のように説明はしません。「聞く耳ある者は聞くべし」と言う。

「何万の説法をしても、私は実は一つも説法をしなかった」

と、釈尊は言います。原始福音の子らは、その魂はこのような言葉を聞き、このようなキリストに出会う。その志をもつてかからなければダメです。そうでなかったら、私は集会を解散いたします。



これは学校の講義ではないのです。預言者たちも、使徒たちもままごとをもって聖書を書かなかった。彼らは血を流し、涙を流し、全生涯を神の前に捧げて、その血をもって書いた文字です。

「声前一言、千聖不伝」

という。声の前の一つの言葉は千の聖ひじりもこれを伝えることができないという。

「聞く耳ある者は聞くべし」

とキリストは言われた。

「お前たちの魂は、お前たちの体は神のものだよ。人から聞こえてくる言葉で救われるようなものではない。人の教えで救われるようなものではないよ」

と。いかなる聖人君子も、いかなる大芸術家も、いかなる大哲人も、人ひとりの魂を救うことができない。あなた方一人ひとりの魂は全世界とも替えることができない。だから、

「99をそちのけにしても1つの魂を真に尋ね、これを救いあげんために」

と、キリストは言われた。今の人たちはなんと魂を粗末にしていることでしょうか。人生また社会また世界国際の一切の問題は、この一個の魂の問題から発しているのです。

神のみすがたに創られている。それを知り給う神。そのことに真に気がついたらば、ぶつ倒れます。立ってられない。

●限りなくながらえる

¹³げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく存のこらん、而して其のうち最も大なるは愛なり。
おお

13節は、

「今やところで、信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく存のこらん」

と。しかしながら、原語を調べてみますと、

「今やところで、信仰と希望と愛とは存のこる、存する」

と書いてありますが、それはそれでいいけれども、「のこらん」という読み方は「ながらえる」、存続することです。その同じ「存」の字でいいけれども、読み方として、

「信仰と希望と愛とは、この三つの者は限りなく存続する、ながらえる」

と。日本語は「限りなく」と書いてあります。これはなるほどそれでもいいけれども、この「限りなく」という副詞はない。

「のこる、ながらえる」

という字です。それを

「限りなくながらえん」

と訳したのは、それはそれでよろしい。ただ「限りなくのこらん」というよりもむしろ、「限りなくながらえん」。ただし、「限りなく」という副詞があるわけではない。意味をくめば、



「限りなくのこる、限りなくながらえる」ということです。

これは「メネイ」「メノー」という字です。しかもここで「メネイ」といつて単数で書いてある。そこは日本語は「動詞に単数複数の形がないので」困りますけれども。霊眼をもつて読むひとは、「ながらえる」というところにそれを読み破ることができます。なぜパウロは三つ複数でありながら単数の形を使っているか。信仰と希望と愛とは一つであるから。この三つのものは三つであるが、離すことができないから。「父・子・聖霊」といい、この三位一体の神、そのように我々の実存の三様態は、三つのありさまは、これは三様にして一、三態一如なのです。この三態一如であるがゆえに、パウロは「存る」という「メノー」という字を「メネイ」という三人称単数現在形で使っている。しかも三つのものを定冠詞も何もつけないで、まるで親しい固有名詞のように、何ともいえないペルゾーン、人格体のような活ける何ものかのような気持で書いている。

なぜそうかという、この「メネイ」という字にもうひとつ豊かな深い意味がある。それは「宿る」という、

「宿る、留まる、居る、長らえる」

というような意味合いを渾然ともっている。ルカ伝24章をお開きになりますと、これが出てくる。有名なエマオ途上において二人の旅人が復活のキリストにでつくわしたところだ。25節、

「²⁵イエス言い給う『ああ愚にして預言者たちの語りたる凡てのことを信ずるに心鈍き者よ。²⁶キリストは必ず此らの苦難を受けて、其の栄光に入るべきならずや』」

「入るべきならずや」というのは、「どうしても入らなければいけないわけではないか」ということです。

²⁷かくてモーセ及び凡ての預言者をはじめ、己に就きて凡ての聖書に録したる所を説き示したもう。²⁸遂に往く所の村に近づきしに、イエスなお進みゆく様なれば、²⁹強いて止めて言う『我らと共に留れ、時々に及びて、日も早や暮れんとす』乃ち留らんとて入りたもう。(ルカ24・25～29)

と、この「留まる」という訳がしてあるが、

「私たちの所に一緒に宿ってください。中へ入ってください。時がもう夕になって日も早や暮れようとしていますから」

と。キリストがここに入って宿ってください。

ルカ伝19章5節のザアカイのところにも、

「⁵イエス此処に至りしとき、仰ぎ見て言いたもう『ザアカイ、急ぎおりよ、今日われ汝の家に宿るべし』」(ルカ19・5)



「私は今日おまえの家へいつて宿るよ」

と。「信仰と希望と愛」とは、これはいつまでも宿るのである。一晩泊まりで、二、三日でサヨナラしていくような私たちみたいではありません。いつまでも宿っている。それでもこれは時間的な宿りです。ところが、この信仰と希望と愛は、これは永遠の宿りです。

「留まらん」ではない。

「宿るのだよ」

というんです。「留まるだろう」なんて聞こえるですね、「留まらん」なんて書いてあると。これは直接法現在形だ。「宿るのですよ」ということ。しかもそこに「今」と書いてある。この「今」は、いい加減にしてはダメです。一番先に「ヌニ・デ」ときている。

「ところで今、信仰と希望と愛とは宿るのだよ」

と。今、いつまでも宿る。言葉が何か矛盾しているようだけど、どういうことですか。

●十字架・復活のキリスト

信仰とは何ですか、信仰とは。私たちはいったい何を信じているか。信仰は、対象がある。しかしながら、実は対象ではなかった。ここにコップがある。コップはひとつの「ゲーゲンシュタント」「対象」です。信仰の相手はそういうコップみたいな対象ではない。私は影の如きものであろうとも、信仰の相手は実存者であります。信仰の相手は、これは主體的な存在です。それが主語的なものです。しかも、その信仰の相手は、信仰の相手のいったいどういうところを焦点にして信ずるのであるか。

「神は永遠にある」

ということを信ずるならば、これは悪魔でも信じている。

「悪魔も信じて戦けり」

と。「神の存在いかん？」ということをいくら宗教哲学的に思索して、結論が唯一神なんてものが出てきたって、その神さまは私たち一人の魂を救わんとしない。私は若い人が、唯神論、多神論、一神論、拝一神論、汎神論なんて、いろんなことを論議したって、

「ああ、どういう結論でもお出しなさい、そんなことはどうでもいいよ」

と、どういう結論を出したって。

「絶対唯一、絶対の神あり」

という結論を出したって、それだって始まらない。人間の結論が出した神さまは、どんなにえらそうな神さまでも、それではどうにもならん。それは対象だから。それは思い浮かべられたるもの「観念」です。そんなことをやっているものだから、マルクスに

「宗教は阿片なり」

なんてやられる。阿片のような宗教があるでしょう。ナザレのイエスが開示したところの事態は絶対に阿片ではない。一切のものを偽りとするとも神・キリストだけは真である。



これのみが真に実存しているものである。この実存は、創造してやまないところの実存です。太陽が光っていれば、地上のものはこうして、地上の生きとし活けるものを在らしめている。太陽がただ向こう側でボカーツと光っているのではない。地上のものは、生きとし活けるものは在らしめられて在る。太陽が在るということは、地上のものを在らしめているということです。

「在らしめて在る」

ものが、本当の「在る」という在り方です。

皆さんが在るというならば、回りの人を真に在らしめるような存在になることが、これが真の在るということです。そのキリストが私たちに、キリストがその在らしめたところのキーポイント、鍵は何であつたか。十字架・復活である。この十字架・復活のキリスト、十字架のキリスト、復活のキリストが即ち私たちの信仰の主體的な事象なのであります。私たちはそれにとらえられた。その前にぶつ倒れて、それに起こされた。十字架のキリストにぶつ倒されて、復活のキリストに起こされたんです。

「ああ、十字架は私たちの罪を贖いました。復活の生命は素晴らしいものです」

なんて、呑気な顔して信じてなんかいられない。それは観念であります。それでいい気になつたら、それは観念です。観念したっていいですよ、けれども、生命の生きが出てこない。事実が証明する。答案は、書かれた答案ではない。答案は、実存が答案なんですから、私たちの実存が。

私たちは

「キリストの書」^{ふみ}

である。不立文字^{ふりあて}なんです、皆さんが。私が何か書いたって、書くことが問題じゃない。私たちは真に実存することが問題なんです。それが即ち文字です。天上に反映しているところの地上の文字は、その人の実存の他は映らない。何を書いたって、そんなものは映らない、天上には。天上に映るものは、その実存が映ってくる。それだけが映る。天国の答案は実存であります。

“Der Mensch ist mehr als seine Arbeit.”

「人間は彼のなしたところよりも更に偉大なものである」

それが本当の人間であるという言葉がある。

●信望愛一如の永遠的な宿り

そういうような神。十字架・復活のキリストが私たちをぶつ倒す。そしてパウロをぶつ倒して、パウロを起こしたではないですか。なにはさておき、あの使徒パウロ、キリストの僕パウロが、最も素晴らしいその実例を示していくくれる。使徒行伝9章、22章、26章あたりは、いい加減な気持ちで読めない。体裁ではないです。



そういう、十字架・復活のキリストは、これは確かに今から前に起こったところの歴史に、どこから突き破って現れてきたところのイエス・キリストの事実であります。この事實は私たちにこの過去の面からグーッと来ている。キリストが、

「私はお前たちを贖い^{あがな}とつたよ」

と。パウロが、

「まだ神を知らず神に背^{そむ}けるとときに、既にキリストは私たちのために贖いを終えたまえり」

と書いてある。

「ただ一回、至聖所に入って、このキリストという大祭司は本当の贖いを終えてしまった」

ということがヘブル書にも書いてある、ヘブル書9章、10章のところに。この一回限り、永遠の一回をもつて彼はその救いの業を完了された。これ過去から迫ってくるところの事態です。信仰とは過去の角度から私たちにグーッと迫ってきている。けれども、単なる過去ではないですよ。今度は、この復活されたところのキリストは昇天して、今、天界にあられる。やがて再臨し給う。

「聖国を来たらせたまえ」

とは、

「今日にも聖国を来たらせたまえ、明日にも聖国を来たらせたまえ」

と。私たちにとつては、質的にいいよその度合いを増しゆくところの、主の祈りであります。ただいわゆる教会でこれを繰り返したってダメですよ。また、無教会が

「ああ、こんな形式はやめる」

といって、本当にそれを祈ることをしなかったらダメですよ。

再臨のキリストは未来的方向から私たちに向かってきている。これ希望の世界です。もう一つまん中にある。何ですか。信仰と希望と愛のうち、真上から垂直にかかってくるものがある。今生きたもうところのキリストから、垂直に皆さんの、私たちの中に宇宙線のごとくかかってくるものがある。キリストの聖霊の愛であります。御霊の愛です。

「信・望・愛」

は、「過去・未来・現在」というこの三つの角度から、私たちに迫ってきた。しかも三つはある点でもって全く焦点してしまう。バラバラじゃない。全く焦点して、その焦点したところから、我々人間、われというものを突き破ってこの中に入ってくる。この焦点したところに自分が立たなければ、これは入ってこないんです、本当の意味において。だから、

「信仰と希望と愛とは汝らのうちに永遠に宿る」

という、入ってきて宿るというのは、この「宿る」という語を単数で書いたのは、

「一体一如に、三体一如となつて、お前の中に入っていくよ」



というのが、パウロの意であると思えます。ヨハネ伝15章にも、

「なんじわがうちに居れ、わがうちに居れ、わが愛に居れ」

と。「居れ、居れ、居れ」と書いてある。葡萄の樹の例えで、

「私は葡萄の樹で、お前たちは枝だよ。私に連なっていないさい。生命は限りなく展開し、この葡萄の枝は全世界に広がっていくんだよ」

と。『愛泉』の中に「真の葡萄樹」というのを書きましたので、お持ちの方は読んで下さい〔註：卷末の付録『愛泉』誌第6号「真の葡萄樹」参照〕。私は、ある意味においては、そこにキリスト教の本質を書いたといってもいい。私はあれを書いたときに本当に感謝した。私は自分の文字をどうの言っているのではない。せつかく私たちに共に共同に与えられているところの真理を、皆さん、本当に粗末にしないでいただきたい。

「この真理を受けとつたらば、この福音を受けとつたらば、私は何も要らん。もう帰りの旅費だけあれば、あとはみんな全部献金していきます」

というような気持が皆さんにありますか。私は献金のことを言っているのではない。本当にそれだけ私たちの魂を、私たちをかく生かしてくださるところの神さまのために、私は献金されたものをみな伝道のために使うだけのはなしです。戦いのために使わせていただきます。どうか、無理はなさらないで下さいよ、私がこんなことを言ったつて。決して無理なんかしてはいかん。けれども、その気合は、皆さん、あると私は信じますが。

キリストはこの信・望・愛という一如となったところに突き破つて、そして、この私たちのの中に宿る。この宿りは一時的な宿りではなくて、これは永遠的な宿りであります。

●十字架がどん底で悪の幕屋を支えている

私たちは「幕屋」と称します。幕屋は、テントは三角錐体で表す。

「神の幕屋」

という言葉が黙示録の終わりの方に出ている。

「天の幕屋」

という言葉がヘブル書の中にあります。

「キリストの幕屋」

という言葉はないです、言葉としては。

「聖霊の幕屋」

という言葉もない。けれども、この現実の私たちの世界、

「悪の幕屋」

という言葉がある。詩篇の中に。

「なんじの大路にすまう一日は千日にもまされり。われは悪の幕屋におらんよりは寧ろわが神の家の門守となさんことを欲うなり。」(詩篇84・10)



というようなわけです。これは悪の幕屋です。今はサタンが、「この世の君^{きみ}」というやつが一応君臨している。この世の君が君臨しているものだから、この世界は始末が悪いわけだ。戦争の歴史、争いの歴史、憎しみの歴史という。これはみんなサタンがかき乱しているからです。そして、我々がまことに情けないことに、その手下になるからです。

ところが、この幕屋に大黒柱が実は立っている。これはキリストの十字架が実は、どん底にちゃんと立って、悪の幕屋を支えているのです。悪の幕屋がなこれで崩れないのは、十字架がこの柱になっている。けれども、キリストも預言しています。マルコ伝13章を見ましても、

「驚くべき時が来る、歴史の終わりが来るぞ」と。

「⁷戦争と戦争の噂^{うわさ}とを聞くとき懼^{おそ}るな、かかる事はあるべきなり、されど未だ終にはあらず。⁸即ち「民は民に、国は国に逆いて起たん」また処々に地震あり、飢饉あらん、これらは産^{うみ}の苦難^{くるしみ}の始なり。……¹⁰かくて福音は先ずもろもろの国人^{くにびと}に宣^{のべ}伝えらるべし。¹¹……唯そのとき授けらるることを言え、これ言う者は汝等にあらず、聖霊なり。

お前たちはしっかりと聖霊によって立っている。

¹²兄弟は兄弟を、父は子を死にわたし、子らは親達に逆い立ちて死なしめん。また実に悲惨なことになる。

¹³又なんじら我が名の故に凡ての人に憎まれん、されど終まで耐え忍ぶ者は救^{すく}わるべし。¹⁴「荒^{にく}す悪むべき者」の立つべからざる所に立つを見ば……」(マルコ13・7～14)

と。ペテロ書の中にも、

「今に主の日がくると、もう天変地異ですべて引っくり返されてしまう」

というように書いてある。とにかく、そういう恐ろしい日がきます。十字架が取り除かれて、引っくり返るときがくる。十字架は救わんとして立っているのに、いつまでも拒んでいれば、それは取り除かれしまう。そうしたら、引っくり返る。

神さまは永遠の昔より在りたもう。永遠とは何ぞや。知りません、私は。ある時、神は天地を創造した。

「元始^{はじめ}に神、天地を創造^{つく}たまえり」(創世記1・1)

と。そして、それがこの終末、再臨の時がくる。これは私がある時、自然に示されたような図式であります。『無教会神学論』(内村鑑三先生20周年記念論説。「曠愛新書」第3号『砂漠はサフランの如く』及び著作集第3巻『無の神学』に収録)という本に書いてあります。

この終末、再臨の時。これを立体的にこの線でもって表す。この線は天上と地上を表す。そして、これは時の流れ、過去から未来に向かう流れである。しかし、こここの所は全部、



永遠という空間。こっちは地獄、これは本地獄、今は仮地獄です。「第二の死」に陥ったらもうお終いです。審きが来た時に、第二の死の中に入れられたらお終い。今は仮地獄、仮天国です。このパラダイスは仮天国ですから。まだこれは仮かりですから。私たちが地上を去って、天界に行く時にはまだ仮天国です。もちろん素晴らしい天界に行く人がありますけれども、とにかく一応、仮なんです。けれども、それが本当に究極的にこちら側からスーッと狭き門を通って行く。ここにも霊の十字架が立つに相違ない。そして、この広々とした永遠の神の幕屋……………。

ある時、キリストはこの地上に来られた。即ち、ロゴス、神の言がキリストに受肉した。これは即ち、驚くべき私たちの捉つかまえられるところの、この信仰の事態です。このキリストの受肉、およびその十字架およびその復活という、驚くべき事態。ちょうど、この十字架の上には聖霊の鳩がとまって――これは象徴的に書けばですよ、ちょうど金色の鳥が神武天皇の弓の上に止まったものだから、眩くらくて賊軍が逃げたという話がある――

「聖霊が鳩の如く」

と書いてある。そして、これは燦々として私たちの中に降ってきている。私たちは、どこだか知らんけれども、今この地上をこういうように時間的に歩いているわけです。時々刻々にこの聖霊は降っている。これが今という世界です。

ある時、今から2千年前に十字架が立ちました。その十字架は今もなお、霊の十字架として現に立っている。

「屠ほふられたるが如き羔こひつじを見たり」

とヨハネが言っている通りです。パウロが、

「十字架につけられたるままの」

と言っている。キリストは既に復活しているのに、「十字架につけられたるままの」なんてことを言っている。これは即ち、霊の十字架であります。そこらの木で出来ている十字架ではない。私たちの胸の中に光っている十字架です。女の方が首から十字架を下げた方がいいですよ。いいけれども、まずそれは胸の中に光っていないてはしょうがない。

●永遠の今

それで、その言が即ち肉となつて、私たちに現に救いを完了してくださった。これが今、私たちの救いを常に押し進めていらつしやっている。それを、さっきの図でもって、十字架・復活および聖霊と再臨のこの三つが一つになってここから入ってくる。即ち、

「十字架・復活・聖霊の事態は切つても切れませんよ」

いつも申し上げている通りなんです。切つても切ることができない。十字架・復活・聖霊、もうひとついって、この「来たりたまえ」の再臨のキリスト。

「主よ、来たりたまえ」



というのは、ただ「来たりたまえ」と言っているのではないことはもう既に申し上げました。私たちの中に来ている。キリストは御霊にあつて来ているんだから、本当にこの「来たりたまえ」という希望が本ものの希望であるのです。こういう三つの事態でもつて、私たちはこの「信・望・愛」が一つとなつて、キリストが宿る。

これは一言でもしいうならば、本当の生命の事態です。過去と現在と未来というものが、あるひとつの「今」という瞬間において、つかまれているから、これは永遠の今であります。私たちは哲学者ではなくても哲学者以上に、「時間」とか「永遠」とかいうようなものに質を与えるものは、内実、実質を与えるものは、私たちこのキリストをもつものなんです。キリストをもたなければ、この時間概念とか何とかいいまして、これはみんな思われたものであつて、本当に現実化してこない。神は歴史の神であるから、終末に望み給うところの歴史的な神でありますから。その時間において、しかもそれは過・現・未に向かつて永遠を掌握している永遠者ですから。父は即ち永遠者ですよ。父は即ち永遠者、子は即ち時間において現れてきたところの、受肉したところの子。また時間において今、現に天界に在りたもうところの子は、正に時間的な存在として私たちに親しく臨んで下さる。

永遠なる父は、見ることも考えることもできない、この霊なる父は。けれども、その父が時間において現れてきましたから、具体的に受肉して私たちに人となつて現れてくれました。今、天界にあるキリストもまた親しく私たちに聖霊において臨んでくださる。だから、一番親しいのはこの子であるわけです。この子に、御子にぶつからなければ、本当に永遠というものに連なることができない。

この「時間」でありますけれども、この子がもしここでもつていうならば、この子は時間においてあるから、また終末において再臨の子としてここから来たりたもうから、聖霊こそはこの時間における「今」のところなんです。もし言うならば、

「永遠と時間と今」〔神と子と聖霊〕

ということに、時間における時々刻々の今は、御霊のキリストがこの今において私たちに常に、今日この所に聖霊のキリストは臨んでくださっている。即ち、御霊のキリストは今というところにおいて、私たちにきている。だから、

「信仰と希望と愛とは今、汝らに宿っている」

という具体的な内容は、御霊の事態なんです。御霊の事態。そして、来たりたもうキリストが今に来たらんと。キリストは今もありますけれども、「来たり給うキリスト」というのはつきりした「パルーシア」〔到来、来臨、出現〕という再臨のキリスト、終末のキリストが待たれている。

神は永遠の存在。これで、私たちは永遠とか時間とか今とかいうようなことが、本当にこの身に体される。私はこのことを実は自分で正直、自然にこうなったら、ある少し風変わりな註解者が割合に同じことを言っているので驚いた。これそっくりではないけれども。



黙示録の19章11節、

「¹¹我また天の開けたるを見しに、視よ、白き馬あり、之に乗りたもう者は「忠実また真」と称えられ、義をもて審きかつ戦いたもう。¹²彼の目は焰のごとく、その頭には多くの冠冕あり、また記せる名あり、之を知る者は彼の他になし。¹³彼は血に染みたる衣を纏えり、その名は「神の言」と称う。

言うまでもなくキリストです。十字架のキリストです。

「^{はじめ}太初に言あり、言は神と共にあり」(ヨハネ1・1)

といったヨハネ伝のあの「言」は、この黙示録のここを見ても、あれはキリストであることがはつきりします。

¹⁴天に在る軍勢は白く潔き細布を著、白き馬に乗りて彼にしたがう。¹⁵彼の口より利き剣いつ、

「利き剣」とは神の言のことです。

之をもて諸国の民をうち、鉄の杖をもて之を治め給わん。また自ら全能の神の烈しき怒の酒槽を踏みたもう。

「怒の酒槽を踏みたもう」というのはイザヤ書63章の始めの方に出ている。キリストの十字架のその血のことです、「怒の酒槽」というのは。

¹⁶その衣と股とに『王の王、主の主』と記せる名あり。」(黙示録19・11、16)
ヘンデルの有名な「キング・オブ・キングズ」というのがこれです。

そういう御言、神の言が肉となつたキリスト。即ちそのキリストは相変わらず黙示録で示されているように、具体的に天において在り給う。ヨハネがこういう幻において示されたところのことは、それは一つの徴ですから、それが現実にとどのような事態においてくるかは、それは秘められたことで、誰か知らんや。徴の言、いわば暗号なんです。暗号は解けない。その時がくるまで。けれども、その暗号において何が指し示されてあるかということは、私たちにかなり見当はつけられますけれども、どういう現実が具体的に来るかとなつたら、それはわからん。それで、パウロは一番あとで、

「信仰と希望と愛と三つのものは限りなく残るけれども、そのうち最も大いなるものは愛である」

と。キリストに救われる。そして永遠の生命に復活させられる。その事態を本当に信じ受けとつて、なんと私たちはうれしか。また必ず神の国はくる。今どんなに苦しくても、地上でどんなにマイナスを受けとつても、どんなに迫害されても、終わりまで耐え忍ぶものは天国に入る、救われる。この希望です。

●愛は最大である

「この世にわが望みは消えゆくとも、主よ、聖意なされたまえ」



という讃美歌がありましたね。何かあきらめみたいだけでも、あきらめではない。

「わが望みは消えゆくとも、神さま、私の望みはいいです。私はどんな望みを持ちましても、私が有つ望みがどんなに素晴らしいものであっても、たかが知れている。わが望みは消えゆくとも、主よ、汝の聖意をなさせたまえ。あなたの聖意は、上からかかってくる希望は、わが希望に比ぶべきものでないものである」

という。

「主よ、御意をなさせたまえ」

とは、私たちの希望に絶し、いわゆる信仰に絶するところのものを私たちに、神さまが、キリストが与えてくださる。この御意の中に最善極致のものが入っている。だから、御意を祈るということは実は、最も祝福された、最も力強い、最も積極的な祈りなんです。

「まあ、仕方がないから最後は、『御意をなさせたまえ』にしておきましょう」

ではない。何を祈っても、お願いしてもいい。けれども、その中のその奥には、本当に「御意をなさせたまえ」がいつも響いていなければいけない。聞こえざるにそれが響いていなければいかん。

どうか皆さん、苦しいことは神さまにお願いしてください。そのまま聞かれることがもちろんあります。それは御意とピタッとそこところが合えば、そのままに「聞かれる」。合わなければ、ズレてしまう。けれども、どんなにズレましても、たとえそのままであっても、実は単なるそのままではない。だから、私たちの希望よりも、祈りよりも以上のことが常に聞かれつつある。常に。これに気がついたら、祈りは本当の勝利です。ああ。祈りは本当の勝利です。祈りは楽しい。もう短い祈りでその中にグッと入ってしまう。ある時は夜を徹して祈りなさい。ある時は2秒でも3秒でも。ある時は、

「お父さまー」

と。これで祈りです。本当に「御意を成させ給え」がその人の魂の叫びになっているならば、祈りはグングンと神さまにつり上げられまして、強化されまして、それで祈りの中で勝利の力を与えられていく。

祈りがただ、

「してください、してください」

で終わったのでは、苦しいですよ、皆さん。詩篇の祈りを見てごらんなさん。始めは、

「わが神、わが神、なんぞ棄てたもうや」

といって苦しく叫んでいるけれども、終わりには、

「神さま、讃美します」

と言っています。

「ああ、私の中に成っていました。神さま、感謝いたします」

と、こういうわけです。



これは即ち、私たちのいわゆる信に絶するとキリストの信が入り、私たちのいわゆる望に絶して絶望するとキリストの望が入り、我々の愛なんてものに絶望するとキリストの愛が入ってくる。これが「宿る」ということです。上から来るところの信が宿る。キリストの信が宿り、キリストの望が宿り、キリストの愛が宿る。いや実に、信のキリスト、望のキリスト、愛のキリストが宿ってくる。

「宿る」、それを一言で何と言いますか。それは「インマヌエル」[Immanuel]と「イマンヌ」。

「インマヌエル」「神われらと共にあり」

これキリストの名だった。

「その名をインマヌエルと称えられん」

という。「エル」「四、神」が「インマヌ」[Immanu、我らと共にいる]と。「神我らと共にあり」というこの言葉はキリストの別名であります。即ち、信望愛が宿るというのは、これはキリストが宿ることなんです。私たちと共にあることである。

そのようにして「共にある」ということを、信仰・希望・愛において、これをパウロやヨハネの書簡において調べれば、相当出てきますが、今はそれをやりません。

「そのうち最も大いになるものは愛なり」

と。さっき言いました、信に生命が来た、望みに喜びがきた。けれども、その生命、その喜びというものの質は何であるか、実質は何であるか。生命の実質は何であるか。喜びの実質は何であるか。これは愛という。だから、

「愛が最も大いなり」

とパウロは言わざるをえなかった。信において受けとったところのこの生命の事態、力の事態。また望みにおいて私たちの中に本当に連関している喜び――詩篇にも黙示録にも大讃美をうたっていますよ――その喜びが溢れるその内実は、実質は何か。これは愛である。もし実質が愛でなかったら、その喜びは浮いてしまう。その生命はこわばってしまう。人を幸いにできない。本当に人を幸いにするところの、人を救いへともっていくところの、その生命はその喜びは愛という実質をもっていなければダメである。それだから、愛は最大であるという。この三つのものは一つであって、しかも愛は最大であるというのは、そこに帰すると私は思う――私は思うではない――そう示される。

●ダンテの『神曲』天国篇

「アモール・エスト・プロプリウム・ノーメン・スピリトゥス・サンクティ」

「愛は聖霊の最初の名である」

と、トーマス・アクイナス[Thomas Aquinas (1225頃～1274)]イタリアの神学者、哲学者」という有名な偉大な中世の神学者が言いました。「愛は聖霊の原始の名である」という。

私が世界の詩のうちで最も愛読しているのはダンテの『神曲』です。ゲーテの『ファウスト』



も好きですけども、しかし、ダンテの『神曲』には及ばない。ただ、日本に藤井先生の『羔の婚姻』という驚くべきものが現れました。残念ながら未完成ですけども、本当に先生はダンテの義憤の魂、深い愛の魂に相呼応しまして、霊筆をふるわざるを得なくせしめられた。最近に『羔の婚姻』がついに出来ましたから、皆さん、おりがあつたらば「読んでください」。日本人クリスチャン、しかも御霊の原始福音の私たちが、これを読まざることは、先生に対し真理に対して申し訳ないです。

この『神曲』の中の数ヶ所の句を引用してみます。天国篇の第3歌のところですよ。

「聖霊の^{よろこび}の^{ほのお}をあげる我らの愛は、神の秩序によって形成されるままたよるこぶ」(天国篇第3曲52～54)

という言葉がある。神の秩序のままたよるこぶに、

「聖霊の喜びにのみ焰をあげるところの我らの愛は、聖霊が来た時にのみ本当の焰をあげるところの愛というものは、神の秩序によって私たちの人生が形成されるままた喜んでいます」

という句があります。

天国篇第10歌の始めの方に、

「父と子とが永遠に息吹きだす愛をもって、

「父と子とが永遠に息吹きだす愛」というのは聖霊のことです。さすがにダンテです。

御子を眺めつつ原始なる絶言の聖力は

「原始絶言の力」というのは神さまの力ことです。語に絶するところの始めの力という。

精神を貫き空間を貫いて廻る万象を創造して玄妙の秩序を与え、

ここでもダンテは「秩序」と言っている。

観る者に味わわざるを得ざらしめる」(天国篇第10曲1～6)

と。天国篇第15歌のところに、

「しかし、私が^{とこしえ}永遠に仰望して見守りまた私を甘美な思いに渴かすところの、

甘美な願いに渴せしめるところの、

聖き神の愛をなおもよく満たさしめんがために、汝の声を高く固く大胆に喜ばしく、

思いをひびかせ、願いをひびかせて、それに向かいわが答えは既に定められている」(天

国篇第15曲64～70)

と言っている、その会話の一節があります。終わりの方で素晴らしいところがある。神曲の最後のところですよ。第33歌のところに、

「高き光の深奥澄明な、深くして澄み渡った本体のうちに、また三色二様の三つ輪が私に現れた。そして、虹と虹のようになつては他より反射する如く、第三のもの「聖霊」は双方より「神と子の双方より」、等しく吹き出づる火のように見えた。」(天国篇第33曲117～120)



神と御子から等しく吹き出づる火のように見えた第三のものが、それは虹の間に見える。これは神・キリスト・聖霊から発するところの愛の事態を虹に例えた素晴らしい表現です。そして、最後の句が、

「高き幻にむかいてここに力は倒れた。」

あまりに広大な素晴らしい幻にぶつかって私の力は倒れてしまった。

しかし既にわが願望と意志とは、さながら等しく廻る輪の如く、太陽と諸々の星を動かす愛に廻っていた。」(天国篇第33曲144～145)

これで神曲は終わっている。太陽と諸々の星を動かす愛に廻っていた。その神の愛の力に廻っていた。ただそれを言うだけ、それを喝するだけだと。

さすがに中世を代表するところの、全生涯を流竄の19年をけみしながら心血をもって書いた。最後の天国篇第13歌以降はついにダンテが死んだ時にはどこにあるかわからない。ダンテはこれを壁の中に閉じ込めてしまった。封ぜられた天国篇第13歌以降。

「どうしたんだろう、13歌以降は？」

と。ダンテに二人の子供がいました。多分、弟の方だったと思います。ある時、夢を見た。

「お父さんが私に現れたよ。そして、『この町の向こうの通りのある建物の壁の中に閉じ込めてあるから、お前、行つて取り出してきなさい』と。兄さん、そういう夢を見たが、ひとつ行つてみよう」

と。行つてみた。そして開いてみたら、そこから天国篇が現れてきたという事実であります。そのように、ダンテがこの神聖なものをみだりに躰したくなかった。彼の啓示は神のものであった。それをまた神の啓示に従つて示させられるとは何たることだろう。

ダンテも藤井先生も真に全身を捧げての詩であります。ベートーベン、バッハの音楽然り。ダビンチ、ミケランジェロ、またレンブラントの絵画然り。私たちが何をいたしましても、真にこの神の息吹に、神・キリスト・聖霊の愛の息吹に化体されて、その生涯の業を本当に献祭として、献げの祭として進みたいのであります。

●キリスト・イエスにある神の愛

ローマ書8章の終わりを読んで終わりにします。31節から、

「³¹然れば此等の事につきて何をか言わん、神もし我らの味方ならば、誰か我らに敵せんや。³²己の御子を惜まずして我ら衆のために付し給いし者は、なにか之にそえて万物を我らに賜わざらんや。³³誰か神の選び給える者を訴えん、神は之を義とし給う。」

キリストの義を与え給う。義のキリストを与え給う。

³⁴誰か之を罪に定めん、死にて甦えり給いしキリスト・イエスは神の右に在して、我らの為に執成し給うなり。



神の右に今、現在にいまして、我らのために執り成し給うなり。大祭司、天にいまして執り成し給うなり。

³⁵我等をキリストの愛より離れしむる者は誰ぞ、^{なやみ}患難か、^{くるしみ}苦難か、^{うえ}迫害か、^{はだか}裸か、^{あやうき}危険か、^{つるぎ}剣か。³⁶録して『汝のために我らは、

この原始福音の者たちは、

^{ひねもす}終日ころされて屠らるべき羊の如きものとせられたり』とあるが如し。

屠られたるが如き羊として、私たちはこの愛の献祭として行くのであります。

³⁷されど凡てこれらの事の中にありても、我らを愛したもう者〔キリスト〕に
^よ頼り、^{あまり}勝ち得て余あり。

人をどん底から救いあげていくところの、このキリストの愛の勝利であります。

³⁸われ確く信ず、^{かた}死も生命も、^{いのち}御使も、^{みつかい}権威ある者も、今ある者も後あらん
者も、力ある者も、³⁹高きも深きも、此の他の造られたるものも、我らの主
キリスト・イエスにある神の愛より、

神の愛より、キリストの愛より、この聖霊の愛より、

我らを離れしむるを得ざることを。」

アーメン。

● 祈り

三日にして宮を建て給いしキリスト。私たちはこの十字架・復活の三日にして倒れかつ、
神さま、あなたが起こし、私たちの救いの基を築いてくださった主イエス・キリストに、
この三日間この身を投じ、私たちの罪、我という罪、我々という罪がしつかりあなたに贖
いとられ、キリストに贖いとられ、今ここに本当に楽しく立たしめられ、感謝いたします。

この絶対恩寵を本当に私たちは幼児の如くなり、

「この恩寵を絶対無条件に受けなさい」

とおっしゃるから、「はいっ」と答えるだけでございます。

お父さま、この兄弟姉妹たち、よく協力してくれました。感謝いたします。そして、本
当にみな、人のことを思い、互いに相愛し相助け学ぶことが、即ち生活においてこれをと
かし、これを身につけてくれたことを感謝いたします。

どうか、いよいよこの三日間のごとく、いやそれよりもはるかにどしどしと前進せしめ
たまわんことを願ひ奉ります。

お父さま、本当にわが杯、われらの杯は溢るるなりと、感謝いたします。われらの頭に
聖霊の油を注ぎ給いしを感謝いたします。本当にこの福音とはなんと驚くべきことであ
う。なんと驚くべき事態でしょう。全聖書一卷、この聖書に全く圧倒されます。いよいよ
聖書に驚嘆驚倒、圧倒されながら、つかまえられながら進みます、包みます。



「今日も明日も次の日も進み行かざるを得ず」

といつて、エルサレムに向かつて行かれたところのキリストにしがみつき、いや実にキリストにつかまれて進んでまいります。

神さま、どうかこの弱き者、この汚れたる者をいつも赦しまた強めてください。そして、いつも本当に偽りなくあなたの前に投ぜしめてください。そして、体裁も何ありません。本当に偽りなく、あなたの礼拝は、

「拝する者は^{まこと}霊と真とをもつてせよ」

と。感謝いたします。どうか、そのようにして兄弟姉妹たちが本当に福音のキリストの子とせられ、

「アバ、父よ」

と、本当にかく呼ぶことができて、うれしく存じます。

どんな嵐が吹いてきましても、20世紀の嵐がどんなに吹ききたりましても、あなたの聖国をこの曠野に現ぜざるを得ません。

「聖国を来らせ給え」

とは、私たち無きが如き者、愚かなる者、弱き者を使ってください。あなたの聖国の土台石にしてください。そしてまた、砂漠はサフランの如く、その最初の初穂として花咲かしてくださるように願ひ奉ります。

お父さま、本当にかくして人生これより楽しきことはなく、人生これより本当に讃美することはありません。うれしく存じます。お父さま、突き抜けました。ありがとうございます。かくして本当に一切の相対的現実を突き抜けてこそ、初めて真に荷えることを体験いたしました。感謝いたします。……

*

付録(参考)

武蔵野だより「曠野の愛」第28号

浅間高原夏季特別集会。1957年10月記之。

既報の如く(26号)、小諸浅間台地で今夏も福音の夏季特別集会をひまわり荘及びささやき荘において開催した。来会者は約百名を算した。詳細な記事を東京神学大学生大塩清之助君が書いてくれたが、紙面の関係でこれを載せ得ないのは残念である。コリント前書第13章を「福音の心臓」と題して四回に亘って講じた。録音してあるがいずれ一卷の書にまとめたいと思っている。「曠愛新書第1号『福音の心臓』(1965/3/1刊)に収録」

右のほかに別講として詩篇第103篇を「絶対恩寵」と題して語った。それが本巻の内容であるが、実際の録音をかなりカットしたものである。……

